

止まった刻

検証・大川小事故

第11部 未来をひらく

2/2

只野哲也さん

生きていく 「奇跡」の先へ

只野哲也さん(18)には、心残りがある。「生きていこうなら」が言えなかった」

2011年3月11日午後2時46分。「起立」。石巻市大川小の5年生教室。帰りの会を終えようとした瞬間、大きな地震が来た。東日本大震災だった。

約50分後、大川小を襲った津波は、多くの友達と家族を奪った。3年の妹末瑛さん(当時9)と、母しろえさん(同41)と、祖父弘さん(同67)と。この日は母の誕生日。妹はパーティーを楽しみにしていた。突然の別れだった。

只野さんは津波にのまれながら助かった。「奇跡」と言われた。殺到するメディアに

体験を語り、校舎の保存を訴えた。「二度と同じようなことが起きてほしくない」「思い出の校舎を残してほしい」。後先など考えず、素直な気持ちを無我夢中で言葉にしてきた。

石巻市は、校舎を震災遺構として保存することを決めた。よかっただと思える半面、「言い出しつべ」の責任がのしかかった。「出たがり」などと陰口を言われ、何度も傷ついた。成長とともに、世間の目が気になった。さまざまな意見や考えが耳に入る。誤解を恐れ、言葉が以前のように出ない。語り続けてきた「大川小の只野哲也」の存在が、疎ましくも感じた。それでも、懸命だった過去の自分に背中を押されるように、語ってきた。

大川小には今も多くの人が訪れる。元教員で遺族の佐藤敏郎さん(54)らとともに、何度か語り部に加わった。関心を持って来てくれた人に、震災で学んだことを伝えたい。

でも、果たして伝わってるんだろうか。自信がない。「自分には、まだ難しい」。日々のニュースを見て考える。災害、事故、殺人事件、いじめ。遺族が語る「二度と繰り返してほしくない」。関係者が頭を下げる「再発防止に努めます」。しかし、悲しみは繰り返され続けている。

大川小の歩みが重なる。父英昭さん(47)らが声を上げ続けた7年間。世の中は変わったのか。いつ起きるか分からない次の大災害で、自分と同じ苦しみを味わってほしくない。頭の中で、堂々巡りする。

運転免許を取った。時折、車で大川小に行く。住民総出で盛り上がった運動会。校庭で食べるお弁当が楽しかった。体育館は学芸会の練習をする。思い出す。中庭は一輪車で転びまくった。楽しい思い出と、あの日の恐怖。祭壇に手を合わせ、思う。「生きるか死ぬか、怖かったことを思い出して、あの日の俺に恥じないように生きていく」



大川小で笑顔を見せる只野さん。日々に流されそうになる自分に「原点」を思い出させてくれる場所だ。6月13日、石巻市総合

2月、大川小の開校式があった。最後の校歌斉唱。「われらこそ、あたらしい未来をひらく」

幼い頃、震災も、今の自分も想像できなかった。未来も、どんな自分になるのかは分からない。迷いと不安に揺れながら、「意見や考えを否定したり押し付けたりせず、人の痛みや悲しみを共感できる人でありたい」と思う。

過去は変えられない。痛みも悲しみも受け止めて、「奇跡」の先の、未来を生きていく。

連載「止まった刻」検証・大川小事故」は今回で終了します。(大川小事故取材班)報道部・山崎敦、村上浩康、片桐大介、斎藤隼人、写真部・庄子徳通、高橋諒

連載への意見や感想をお寄せください。〒980-8660 河北新報社編集部「大川小事故取材班」電子メールはアドレス Okawara@kaihyo.com Kahoku.co.jp フォックスは0922(241)11026